琉球大学学術リポジトリ

中心性漿液性脈絡網膜症における Loculation of Fluid の存在に関わる臨床要因

メタデータ	言語: en
	出版者: 琉球大学
	公開日: 2022-06-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 今永, 直也
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002018040

令和 4 年 2 月 21 日

（別紙様式第７号）

論　文　審　査　結　果　の　要　旨

報告番号	課程博 ＊ 第　号 論文博	氏名	今永　直也
論文審査委員	審査日	令和	4年　2月　9日
	主査教授	高山千利	審
	副査教授	中村幸志	印
	副査教授	西江昭弘	印

（論文題目）

Clinical Factors Related to Loculation of Fluid in Central Serous Chorioretinopathy

（中心性漿液性脈絡網膜症における Loculation of Fluid の存在に関わる臨床要因）

（論文審査結果の要旨）

【研究の目的】

脈絡膜は眼血流の 80%以上を担い、脈絡膜毛細血管板を介した視細胞への酸素や栄養供給に加え、網膜外層の機能維持を司る重要な組織である。従って、脈絡膜の解剖学的・生理学的な理解は、網脈絡膜疾患の発症機序解明や新規治療法確立のために不可欠である。近年、光干渉断層計（OCT）の技術革新により、中心性漿液性脈絡網膜症（CSC）や一部の加齢黄斑変性において、脈絡膜肥厚や脈絡膜血管拡張などの所見がみられることが報告され、それらの脈絡膜所見を特徴とする pachychoroid という病態概念が注目されている。Pachychoroid は網膜色素上皮障害、漿液性網膜剥離、さらには脈絡膜血管新生に深く関与することが知られているが、生じる正確なメカニズムは不明であった。今永氏らは前眼部 OCT を用いることで、従来は描出困難であった強膜断層像を可視化し、定量化できる手法を確立した。その上で、pachychoroid の形成機序の一つとして、脈絡膜血流の眼外への排出路である渦静脈が貫通する強膜に異常が存在するという仮説を立て、pachychoroid 関連疾患の代表である CSC 眼における強膜断層像を検討した。その結果、CSC 眼では正常眼に比べて厚い強膜を有し、強膜構造の変化が CSC の病態に関与している可能性を見出した。本研究では、CSC 眼の特徴的な所見の一つであり、脈絡膜上腔の液体貯留とされる loculation of fluid (LOF)に着目し、三次元的な眼球バイオメトリーの画像解析を行うことで、LOF と関連する臨床因子を検討した。

【対象と方法】対象は CSC 連続症例 158 例 158 眼（平均年齢 51.2 歳）。LOF の有無にて LOF 群、non-LOF 群に分類し、両群間で年齢、等価球面度数（SE）、眼軸長（AL）、中心窩下脈絡膜厚（SCT）、強膜厚について比較検討した。両眼症例は右眼を検討対象とした。

【結果】

症例の内訳は LOF 群 98 眼、non-LOF 群 60 眼。平均年齢は LOF 群 50.2 歳、non-LOF 群 55.1 歳（$p = 0.01$）、平均 SCT は LOF 群 448 μm、non-LOF 群 336 μm（$p < 0.01$）と LOF 群において有意に年齢が若く、SCT が厚かった。強膜厚は上方、耳側、下方、鼻側において、全象限で有意に LOF 群が厚かった（426 μm vs. 395 μm, 446 μm vs. 415 μm, 459 μm vs. 429 μm, 445 μm vs. 414 μm, 全て $p < 0.01$）。SE、AL は両群間に有意差はなかった。年齢、性別、AL、SCT、4 象限の平均強膜厚を独立変数としたロジスティック回帰分析では、LOF は SCT（$p < 0.01$）と平均強膜厚（$p = 0.02$）で有意に関連していた。

【結論】

CSC における LOF の存在に SCT や強膜厚が関与している可能性が示唆された。本研究の結果は CSC の病態に強膜が深く関与していることを支持すると同時に、強膜をターゲットにした CSC の新規治療の可能性を示すものである。

令和4 年 2 月 21 日

（別紙様式第８号）

最 終 試 験 結 果 の 要 旨

報告番号	＊課程博第　　号	氏名	今永　直也
論文審査委員	審査日　令和　4年　2月　9日		
	主査教授　高山千利		
	副査教授　中村幸志		
	副査教授　西江昭弘		

（最終試験結果の要旨）

口頭による公開検討によって最終試験を行い、以下の件について確認した、

1．提出論文の内容、意義についてよく把握していること。
2．研究の目的と方法について理解、熟知していること。
3．研究の結果について正しく解析していること。
4．関連研究の文献をよく理解していること。
5．研究成果の展望について確かな見解を有していること。

審査の結果、これらに関する質問に対して十分満足なる回答が得られたため、本大学院博士課程を修了するに値すると判断し、最終試験を合格とした。

備　考　1　用紙の規格は、Ａ４とし縦にして左横書とすること。
　　2　＊印は記入しないこと。